同	十六日(火)	午後八時	大分市美會堂
同	二十一日(日)	午後四時	東京青山長者丸美教會
同	廿二日(月)	午後二時	青山學院
同	廿七日(土)	午後八時	神奈川美教會
同	廿八日(日)	午前八時	同上
七月			
同	一日(水)	午前七半	青山學院
同	十一日(土)	午後七時	熊谷町劇場
同	十二日(日)	午前十時	同　美會堂
同	日(日)	午後八時	同　美會堂
同	十九日(日)	午前九時	東京三田美會堂
同	廿六日(日)	午後七時	青森縣八戸町美會堂
同	日(日)	午後二時	同上　婦人會
同	日(日)	午後八時	同　美會堂
同	廿七日(月)	午前十一時	同　高等女學校
同	日(月)	午後八時	同　八戸聖公會堂
同	三十一日(金)	午後八時	同　青森市美會堂
八月			
同	一日(土)	午後二時	同　北津輕郡五所川原町農學校
同	日(土)	午後八時	同上　沼館
同	二日(日)	午後四時	同上　木造町劇場
同	日(日)	午後八時	同　五所川原町議事堂
同	三日(月)	午後八時	同　南津輕郡蓬崎村美會堂
同	四日(火)	午前	同上　小學校
同	日(火)	午後八時	同　美會堂

境遇人の乎、將信仰の人乎	
說教（石坂つる子葬儀にて）	
故津田仙翁追悼記念演說	
觀心	
新教會の標榜	
海と山と青年	
最高の經濟論	
新教會の標榜	
觀心	
合同教會の標榜	
新教會の標榜	
スザンナ・ウエスレ	
基督教唯心論	
女子教育論一班	
基督教唯心論	
觀心是觀人	
世界の大勢	
高等農業談	
演說	
演說	
高等實業談	
教育談	
人物鑑定論	

同	六日(木)	午後八時	同　弘前市美會堂
同	七日(金)	午後八時	秋田縣能代港倶樂部
同	八日(土)	午後三時	同　秋田市公會堂
同	九日(日)	午前十時	同上　美教會堂
同	日(日)	午後八時	同上
同	十日(月)	午後四時	山形縣天童美會堂
同	日(月)	午後八時	山形市美會堂
同	十一日(火)	午後八時	同上
同	十二日(水)	午後二時	山形縣米澤市松岬館（有志懇親會席上）
同	十三日(木)	午後二時	同上　議事堂學事會
同	日(木)	午後八時	同上
同	十四日(金)	午後八時	福島縣白河町議事堂
同	廿三日(日)	午前九時	東京牛込袋町美會堂
同	廿五日(火)	午後二時	神奈川縣國府木郷小學校（村長及び數名の有志者の催）
同	日(火)	午後七時	同　小田原町美教會
同	三十日(日)	午前九時	東京青山長者丸美教會
九月			
同	六日(日)	午前十時	堺市材木町美教會
同	日(日)	午後八時	同上
同	七日(月)	午後八時	大阪府福島美講義所
同	十日(木)	午後八時	靜岡縣蔦枝町美教會
同	十三日(日)	午後八時	千葉縣佐原町美教會
同	十九日(土)	午後八時	越後高田町美講義所
同	二十日(日)	午前十時	同上

歸順標程	
演說	
國粹を啓發して國是を贊成す	
新教會の標榜	
觀人論	
新らしき誡	
觀人論	
境遇乎、將信仰乎	
所感（時事盡務を論ず）	
人格修養　附「女子教員小兒重二法律」	
人物鑑定論	
演說	
歸順標程	
敬神論	
高等實業談	
御心にかなふ心	
新教會の標榜	
神を信じ己を修むべし	
說教	
高等實業談	
演說	
說教	

同	日(日)	午後八時	同上
同	廿一日(月)	午　後	信州松代町公會堂
同	廿二日(火)	午後八時	同　屋代驛
同	廿三日(水)	午後八時	同上　戸倉某家
同	廿四日(木)	午後八時	同　小諸町
同	廿五日(金)	午後八時	同上
同	廿六日(土)	午後八時	同　豊科町美會堂
同	廿七日(日)	午前十時	同　長野市美會堂
同	廿七日(日)	午後八時	同上
同	廿八日(月)	午前十時	同　梓丸山講議所
十月	四日(日)	午前十時	東京青山學院
同	七日(水)	午後七半	下の關觀音崎町美教會
同	八日(木)	午後四時	同　鐵道員合宿所(鐵道ミッション館)
同	日(木)	午後八時	同　美教會
同	九日(金)	午後七時	門司楠町美教會
同	十一日(日)	午前十時	朝鮮京城旭町美教會
同	日(日)	午後七半	同上
同	十二日(月)	午後七半	同　京城商業會議所(青年會の催)
同	十三日(火)	午後八時	同　扨覩美教會堂
同	十四日(水)	午後八時	同　仁川美會堂
同	十五日(木)	午後三時	同　京城旭町會堂(婦人會)
同	十六日(金)	午後七時	同　平壤民團役場樓上
同	十七日(土)	午後八時	同上　鐵道倶樂部

演說	世界よりも貴き物	
演說	兩界一法	
演說	死生一貫	
人の眞價	更生の必要	
境遇乎、將主義乎	我等の神	
高等實業談	汝らは神の室なり	
基督農業談	兩種の生涯	
新教會の標榜	靈言靈意	
神の見給ふ物	競爭論	
說教	說教	
新らしき誡	境遇乎、將信仰乎	
同上	新らしき教	
人格論	人格修養談	
心を觀る	我を知る者は誰ぞや	
二種の代表者	朝鮮談及び實業談	
歸順の路すがら	神につきて富める者は禍也(ルカ傳十四章)	
新らしき教	新しき酒は新しき革袋に盛るべし	
人格修養談	先のものは後になり後の者は先となるべし	(韓國所感)
新らしき教	最良の友	
基督實業談	競爭論	
路加傳十章の終りに就て	キリスト實業論(第一)	
國是を體して世界一家の精神を養ふべし	同上　(第二)	
心を觀よ	神の話	

同	十八日(日)	午前十時	同上　諸町會堂
同	日(日)	午後四時	同上　(米國人禮拜)
同	十九日(月)	午　後	同　平壤三輪氏宅
同	二十日(火)	午後八時	同　鎭南浦美講義所
同	廿一日(水)	午　後	同上　講義所
同	廿三日(金)	午後八時	同　京城美會堂(親睦會)
同	廿四日(土)	午後六時	同　龍山青年會
同	廿五日(日)	午前十時	同　名古屋城會堂
同	日(日)	午後二時	朝鮮名古屋城韓人青年會
同	日(日)	午後七半	同上　教會
同	二十八日(水)	午後三時	山口市中川原美會堂
同	日(水)	午後七半	同上
同	廿九日(木)	午後三時	同　高等商業學校
同	日(木)	午後七半	同　中川原美會堂
同	卅一日(土)	午後八時	參州海老美會講義所
十一月	一日(日)	午後二時	參州新城平井講義所
同	日(日)	午後七時	同　豐橋美教會
同	六日(金)	午前九時	東京青山學院
同	八日(日)	午前十時	同　牛込袋町美教會
同	八日(日)	午後七時	東京九段美教會
同	十一日(水)	午後七時	武州本庄美會堂
同	十二日(木)	午後七時	同上
同	十五日(日)	午前十時	本郷中央會堂

同	日(日)	午後七時	麻布鳥居坂美教會
同	十七日(火)	午後七時	越中魚津町美教會
同	十八日(水)	午前九時	同上　中學校
同	日(水)	午後三半	越中富山美教會(懇談會にて)
同	日(水)	午後七時	同　新庄
同	十九日(木)	午後三時	同　伏木町劇場
同	日(木)	午後七時	同　高岡美會堂
同	二十日(金)	午後二時	能登七尾中學校
同	日(金)	午　後	能登七尾美會堂
同	廿一日(土)	午後七時	加賀金澤市白銀町講義所
同	廿二日(日)	午前十時	同上　廣坂通美教會
同	日(日)	午後七時	同上　白銀町講義所
同	廿三日(月)	午後一半	越前福井市美教會堂
同	日(月)	午後七日	同上
同	廿四日(火)	午後七時	若狹敦賀市萬象閣(公會堂)
同	廿六日(木)	午前十時	加賀金澤清水女學校
同	日(木)	午後七時	愛知縣小牧美教會
同	廿七日(金)	午後七時	三河西尾美會堂
同	廿八日(土)	午後七時	駿州氣賀劇場
同	廿九日(日)	午前十時	同　氣賀美會堂
同	日(日)	午後七時	遠州濱松美教會
同	三十日(月)	午後七時	同　相良町美會堂
十二月	一日(火)	午前九時	駿州川崎町中學校

二種の生涯	同	六　日(日)	午前十時	長野市美教會
境遇乎、將信仰乎	同	日(日)	午後七時	同上
人格論	同	九　日(水)	午　後	京都伏見
新らしき敎	同	十　日(木)	午前七時	神戸新會堂
神の話	同	十一日(金)	午前十時	同　師範學校
同上	同	日(金)	午後三時	姫路市師範學校
實業談	同	日(金)	午後七時	同　國府寺町美講義所
品性論	同	十二日(土)	午後七時	福山美講義所
神は靈なれば拜する者も靈と眞となつくすべし	同	十三日(日)	午後七時	廣島紙屋町美會堂
二種の生涯	同	十四日(月)	午前九時	廣島女學校
遠征	同	日(日)	午後七時	岩國美會堂
神の見玉ふ物	同	十五日(火)	午後七時	岩國美會堂
韓國視察談　人格論	同	十六日(水)	午後七時	三田尻浮岡村講義所
精神界經濟談	同	十七日(木)	午後七時	鑑山美講義所
演說	同	十八日(金)	午後七時	松山二番町會堂
同上(女生徒に對して)	同	二十日(日)	午後七時	京都御幸町美會堂
演說	同	廿六日(土)	午後七時	川越町高等會議所
說教	同	廿七日(日)	午前十時	同　江戸町美會堂
新勢力				
新教會の標榜				
經濟談				
演說				
人格談				

明治四十二年

一月	十六日(土)	午後二時	神戸美教會
同	日(土)	午後七時	同上
同	十七日(日)	午　前	同上

說教(獻堂式)	
演說	
說教	
說教	
演說	
說教	
精神界の經濟談	
自然に安んぜんか、恩寵に賴まんか乎	
講話	
演說	
靈界實利談	
同上	
演說	
二種の生涯	
說教	
說教	
クリスマス祝辭	
演說	
新年所感	
靈言靈意	

同	日(日)	午後二時	同　緒人大會
同	日(日)	午後七時	同　關西學院
同	十八日(月)	午後四時	門司美會堂
同	十九日(火)	午後一時	小倉常磐座
同	廿一日(木)	午後七時	豐前若松美教會
同	廿二日(金)	午後三時	直方町郡會議事堂
同	廿三日(土)	午後七時	中津町美教會
同	廿四日(日)	午前十時	同上
同	同(日)	午後七時	後藤寺
同	廿五日(月)	午後二時	豐津
同	日(月)	午後七時	行橋
同	廿七日(水)	午後七時	福岡
同	廿八日(木)	午後七時	佐世保
同	廿九日(金)	午後三時	大村町講義所
同	日(金)	午後七時	同
同	三十日(土)	午後七時	長崎銀屋町美會堂
同	卅一日(日)	午前十時	同上
同	日(日)	午後二時	同　通信倶樂部
同	日(日)	午後七時	同　銀屋町美會堂
二月	一日(月)	午後七時	久留米市美會堂
同	二日(火)	午後七時	大牟田美會堂
同	三日(水)	午後七時	山鹿町美會堂
同	四日(木)	午後七時	熊本市美會堂
同	五日(金)	午後七時	八代町美講義所
同	六日(土)	午後七時	國分美會堂
同	七日(日)	午前十時	鹿兒島市美教會
同	日(日)	午前七時	同上
同	八日(月)	午後七時	同上
同	九日(火)	午後四時	串大野町
同	十日(水)	午後七時	隈の城美會堂
同	十四日(日)	午後三時	掛川美教會
同	日(日)	午後七時	見付町會堂
同	十五日(月)	午後七時	大宮講義所
同	十六日(火)	午後七時	吉原町講義所
同	廿八日(日)	午前十時	甲州谷村町美會堂
同	日(日)	午後七時	同上
三月	一日(月)	午後七時	甲州勝沼美會堂
同	二日(火)	午後二時	甲府美會堂
同	七日(日)	午前十時	東京淺草美教會
四月	十八日(日)	午前十時	青山長者丸美教會
同	二十四日(土)	午後七時	四那須野町美會堂
同	二十五日(日)	午前十時	四那須野町美會堂
同	日(日)	午後八時	佐久山町講義所
五月	四日(火)	午後七時	信州坂下美會堂
同	五日(木)	午後六時	同上
同	六日(木)	午後七時	同　飯田美教會

マリヤ、マルタ	講演
年頭所感	新國民と新勢力
精神界實利談	教育と宗教との關係
精神界實利談	血肉を貫通して精神に達するを要す
演說	精神界實利談
同上	演說
說教	人格論(中學生の爲)
二種の生涯	新國民と新勢力
靈言靈意	人格と職業
說教	精神界實利談
說教	說教
新國民と新勢力	路加傳十二章十五節に就て
新國民と新勢力	靈言靈意
高等實利談	克己と幸福
新國民と新勢力	精神界實利談
說教	演說
十字架と幸福	靈界實利談
說教	教會現狀
說教	說教
說教	說教
說教	眞の富
貯蓄並最貴の寶	教會の現狀及覺悟

同	八日(土)	午前十一時	同　龍岡町教員連合會	演說
同	日(土)	午後三時	同　龍岡集會所	講話
同	日(土)	午後八時	同上	神と富
同	九日(日)	午前十時	同　飯田、東野美會堂	基督門徒の爲めに祈る
同	日(日)	午後七時	同上	神の子
同	十日(月)	午後二時	同　風越館(婦人會)	廿世紀の婦人は何をなすべきか
同	十三日(木)	午後七時	甲府美教會	演說
同	十六日(日)	午前十時	九段美教會	說教
同	二十日(木)	午後二時	麻布霞町齋場	亡清水喜代子孃の葬儀說教
同	廿一日(金)	午後七時	銀座美教會	情の宗教
同	廿三日(日)	午前十時	青山學院	同上
同	三十日(日)	午後七時	下谷美教會にて	靈界旅案內
六月	六日(日)	午後八時	總州水海道美會堂	演說
同	七日(月)	午後一時	同　中學校	修養に就て
同	日(月)	午後八時	同　美會堂	矯風に就て
同	十三日(日)	午前九時	鎌倉大町美會堂	說教
同	日(日)	午後八時	同上	說教
同	二十日(日)	午前十時	東京麻布鳥居坂美教會	日本基督者の覺悟
同	日(日)	午後七時	横濱逢萊町美教會	我等は誰に往かんや
同	二十七日(日)	午後七時	本郷中央會堂　(信徒修養會)	神の思想
(自七月廿一日至八月八日病氣保養の爲青森縣中津輕郡岩木山麓常磐野に在り)				
九月	十二日(日)	午前九時	相州茅ヶ崎病院	精神界實利談
同	五日(日)	午後四時	東京弘道館(故龜山松次郎葬儀)	說教
同	十九日(日)	午前十時	總州片貝村伊藤某宅	人生の準備と人命の尊貴
同	廿六日(日)	午前九時	同上	約翰傳第八章に就て
同	廿七日(月)	午後二時	同　片貝小學校　(有志者の爲め)	國粹三論
十月	三日(日)	午後七時	同　片貝村某所	說教
同	五日(火)	午前九時	神田青年會	感謝
同	十七日(日)	午後七時	大磯講義所	演說
同	廿四日(日)	午前十時	二の宮町會堂	人生の準備
同	廿一日(日)	午前十時	生澤	約翰傳十四章の五章に就て
十一月	二日(火)	午後二時	大磯町美講義所	スザンナ・ウエスレ
同	十四日(日)	午後二時	青山女學院　(同學院三十五年記念會)	女訓小言
同	廿八日(日)	午　前	生澤町講義所	約翰一章四十三節以下に就て
十二月	一日(水)	午後一時	國府村補習學校　(竣工式に於て)	演說
同	五日(日)	午前十時	生澤講義所	點示錄三章二十節に就て
同	日(日)	午後七時	大磯講義所	心を親よ
同	十二日(日)	午前十時	小田原教會	エペソ五章一節に就て
同	十九日(日)	午前十時	生澤講義所	演說
同	廿六日(日)	午前十時	同上	路加二章四十一節以下に就て

明治四十三年

一月	二日(日)	午　前	鎌倉メソヂスト教會	十二歲のキリスト
同	三日(月)	午　前	神奈川縣中郡國府小學校	演說
同	九日(日)	午　前	生澤教會	詩篇五十一篇に就て
同	十五日(土)	午　後	沼津町舊城內教會	教會の現狀並に將來

同	十六日(日)	午前	沼津町メソヂスト教會	キリスト第一の教訓
同	三十日(日)	午前	神戸教會	救はるゝ者は誰ぞ
二月	九日(水)	午後	呉市(幻燈會)	演說
同	十一日(金)	午後	呉日基連合說教會	演說
同	十三日(日)	午後	廣島メソヂスト教會	誰か救を受くべき者ぞ
同	廿七日(日)	午前	東京麻布鳥居坂教會	說教
三月	十三日(日)	午前	大阪東部教會	吾人は嚴き主人の僕なりや
同	三十日(土)	午前	ナツシユヴイル、ウエスレホール	我が恩惠
五月	廿二日(日)	午後		演說
同	廿四日(火)	午前	カルヴアレ浸禮教會	演說
同	同　日(火)	午後	コンヴエンシヨンホール(ワシントン)	國別五分演說
同	廿九日(日)	午後	シアーヂ市一〇三街メソヂストエピスコパル教會內日本人會	演說
六月	七　日(火)	午後	英國行汽船クルーランド號內	宣教事業協同并に宣教師增加の必要
同	十六日(木)	午前	エデンバラ	演說
同	十九日(日)	午後	ヒルリグ教會	演說
同	廿二日(火)	午後	アツセンブリホール	演說
同	廿四日(金)	午後	アツセンブリホール	演說
七月	二十日(水)	午後	セントジヨージホテル	演說
八月	九　日(火)	午後	盤府	演說
同	十二日(金)	午後	バングーパーミツシヨン	說教
同	十四日(日)	午後	ヴイクトリヤ日本人ミツシヨン	演說
同	十八日(木)	午後	ヴイクトリヤ日本人ミツシヨン	說教
同	廿一日(日)	午前	バングーパーセントアンドルー長老教會	日本に關する演說
同	廿一日(金)	午後	ミツシヨン	說教
同	廿三日(火)	午後	日本人ミツシヨン	演說
同	廿四日(水)	午後	ヴイクトリヤの總會	說教
同	廿五日(木)	午後	ミツシヨンの送別會	演說
同	廿七日(土)	午後	シアトル救世軍會場	說教
同	廿八日(日)	午前	シヤトル、メンの會堂	說教
同	同　日(日)	午後	青年會講堂	說教
同	三十日(火)	午後	ポルトランド救世軍	說教
同	卅一日(水)	午前	ポルトランド青年會	演說
九月	三　日(土)	午後	桑港コンガリゲーシヨン教會	演說
同	四　日(日)	午前	バークレコレヂ、メソヂスト教會	我等は誰に往かんや
同	同　日(日)	午後	オークランド美以教會	演說
同	八　日(木)	午後	ロスアンゼルス教會(スラビンス氏長子の牧する)	演說
同	九　日(金)	午後	サンタアンナ(日米協友會發會式)	說教
同	十　日(土)	午後	リバサイド美以ミツシヨン	演說
同	同　日(土)	午後	經府	演說
十一	日(日)	午前	羅府第一美以教會	說教
同	同　日(日)	午後	羅府テンペレンステンプ聯合禮拜	安全なる幸福
同	廿一日(水)	午後	布哇キング街教會	說教
同	廿三日(金)	午後	ヌアヌ教會	演說
同	廿四日(土)	午後	歡迎會	演說
同	廿五日(日)	午前	美以教會	說教
同	同　日(日)	午後	リバーストリート教會	

同	廿六日(月)	午前	青年會	講演
同	同　日(月)	午後	上代氏教會	說教
同	廿七日(火)	午前	青年會	講演
同	同　日(火)	午後	アイエア教會	演說
同	廿八日(水)	午後	マキキ組合教會	說教
同	廿九日(木)	午後	樂園クラブ	演說
同	三十日(金)	午後	ワヒノヲ耕地	說教
同	同　日(金)	午後	各派聯合青年會	演說
十月	一　日(土)	午後	キング街教會	說教
同	二　日(日)	午前	リバ街會堂	說教
同	同　日(日)	午後	リバ街會堂	說教
同	廿三日(日)	午前	東京廠布教會	時勢と教會
同	同　日(日)	午後	東京銀座教會	演說
同	三十日(日)	午後	朝鮮京城旭町教會	說教
十一月	二　日(水)	午後	京城旭町教會	演說
同	五　日(土)	午後	平壤新會堂	時勢論
同	六　日(日)	午前	平壤新會堂	說教
同	同　日(日)	午後	平壤新會堂	說教
同	七　日(月)	午後	平壤クラブ	演說
同	同　日(月)	午後	平壤新會堂	演說
同	八　日(火)	午後	鎭南浦府廳樓上	時勢所感
同	同　日(火)	午後	鎭南浦講義所	演說
同	九　日(水)	午後	黃州クラブ	演說

明治四十四年

一月	二十一日(土)	午後	東京中央會堂(二十年記念會)	演說
二月	十二日(日)	午前	東京市銀座教會	教會建築の覺悟
同	十九日(日)	午前	東京市本郷駒込教會	倫理と信仰
同	二十六日(日)	午前	東京市淺草教會	說教
三月	五　日(日)	午前	東京市本郷中央會堂	至大の契約
四月	一　日(土)	午後	東京市廠布女學校(卒業式)	演說
同	五　日(水)	午後	廣島市紙屋町教會	年會說教
同	九　日(日)	午前	廣島市同教會	傳道本戰の時期
同	十六日(日)	午後	京都市青年會館	生ける其督
同	同　日(日)	午後	京都市御幸町日美教會	なくてならぬ物
同	二十六日(水)	午前	青山學院(始業式)	演說
同	三十日(日)	午前	横濱市蓬萊町教會	生ける基督
五月	七　日(日)	午前	名古屋市南久屋町教會	至大の契約
同	八　日(月)	午後	名古屋市同教會	說教
同	十　日(水)	午後	名古屋市御園町西部教會	說教
同	十一日(木)	午前	名古屋中學校	演說
同	十六日(火)	午後	福島市日本基督教會	演說
同	十七日(水)	午後	仙臺市東北學院(二十五年記念會)	演說
同	十八日(木)	午前	東北學院專門部同窓會	演說
同	十九日(金)	午前	仙臺市尙絅女學校	演說
同	同　日(金)	午後	仙臺市東北學院	演說
同	二十日(土)	午後	福島縣白河農學校	精神的時務論

同	二十一日(日)	午後	栃木縣四那須野大和組工場	演說
同	二十二日(月)	午後	栃木縣佐久山教會	說教
同	二十三日(火)	午後	宇都宮市旭町教會	國運と國民の信仰
同	二十四日(水)	午前	宇都宮市女子師範學校	演說
六月	八日(木)	午後	盛岡市大澤川原町教會	國民と信仰
同	九日(金)	午後	盛岡市　同教會	演說
同	同日(金)	午後	盛岡市　同教會	演說
同	十日(土)	午後	青森縣八戸町小學校	說教
同	十一日(日)	午前	青森縣八戸町番町教會	說教
同	同日(日)	午後	青森縣八戸町番町教會	說教
同	十二日(月)	午後	青森縣三本木南氏宅	人間の價値
同	十三日(火)	午前	青森縣三本木同氏宅	說教
同	十四日(水)	午後	函館區會所町教會	演說
同	十五日(木)	午後	函館區遺愛女學校	演說
同	十八日(日)	午前	岩内町鷹鑒町教會	人間の價値
同	同日(日)	午後	岩内町同　教會	人格者には人格者
同	十九日(月)	午後	小樽區稻穗町教會	說教
同	二十日(火)	午後	小樽區同　教會	國勢の發展と國民宗教(第一回)
同	二十一日(水)	午後	小樽區同　教會	同上(第二回)
同	二十三日(金)	午後	札幌區北一條教會	國運の現狀より宗教の必要に及ぶ(第一回)
同	二十四日(土)	午後	札幌區同　教會	同上(第二回)
同	二十五日(日)	午前	札幌區同　教會	說教
同	二十六日(月)	午後	岩見澤町組合教會	說教

同	二十七日(火)	午後	旭川町四條通教會	國運と宗教
同	二十八日(水)	午後	旭川町同　教會	演說
七月	五日(水)	午後	北海道八雲講義所	說教
同	六日(木)	午後	函館區商業倶樂部	演說
同	八日(土)	午後	青森市メソヂスト教會	良き戰(第一回)
同	九日(日)	午後	青森市同　教會	同上(第二回)
同	十一日(火)	午後	弘前市小學校教育會	演說
同	十三日(木)	午後	青森縣大館講義所	說教
同	十四日(金)	午前	同　講義所(婦人會)	講話
同	同日(金)	午後	秋田縣熊代講義所	說教
同	十五日(土)	午後	秋田市長町講義所	說教
同	十六日(日)	午後	同　講義所	說教(前夜の續き)
同	十七日(月)	午後	山形縣天童教會	演說
同	同日(月)	午後	山形市横町教會	說教
同	十八日(火)	午後	米澤市立町教會	善戰
同	二十三日(日)	午前	東京市下谷教會	善戰
八月	二十日(日)	午後	長野縣輕井澤	國運と宗教
同	二十四日(木)	午後	長野市メソヂスト教會	善戰
同	二十五日(金)	午後	松本市柳屋教會	說教
九月	三日(日)	午前	弘前市メソヂスト教會	說教
同	同日(日)	午後	弘前市同教會	演說
同	五日(火)	午後	弘前市大成小學校	說教
同	六日(水)	午後	弘前市メソヂスト教會	說教

同	八日(金)	午後	青森縣七戸小學校	演說
同	十七日(日)	午前	福井縣敦賀講義所	約翰傳十四章一節につき
同	同日(日)	午後	福井市メソヂスト教會	愛國論
同	十九日(火)	午後	金澤市廣坂通教會	善き戰を戰ふべし
同	二十日(水)	午後	金澤市白銀町教會	國運と國民の宗教
同	二十一日(木)	午前	金澤市北陸女學校	演說
同	同日(木)	午後	富山縣魚津講義所	演說
同	二十二日(金)	午前	富山縣魚津中學校	演說
同	同日(金)	午後	富山市中學校	演說
同	二十三日(土)	午前	富山市商業學校	演說
同	二十四日(日)	午後	高岡市	演說
同	二十六日(火)	午後	直江津市岡島町講義所	說教
同	二十七日(水)	午後	長野市メソヂスト教會	說教
十月	八日(日)	午後	東京市青山長者丸教會	說教
同	十九日(木)	午後	東京市本郷中央會堂	監督告辭
同	二十二日(日)	午前	同　中央會堂	說教
十一月	三日(金)	午後	東京本郷中央會堂	演說
同	九日(木)	午前	青山學院神學部	講話
同	十七日(金)	午後	鎌倉メソヂスト教會	默示錄三章十九、二十節につき
同	十六日(土)	午前	同　同　教會	演說
同	十九日(日)	午前	青山學院弘道館	中心論
同	同日(日)	午後	東京市銀座教會	默示錄三章二十五節につき
同	二十二日(水)	午前	青山學院	演說
同	二十四日(金)	午後	東京市九段教會	說教
同	二十五日(土)	午後	山梨縣甲府纒町會堂	演說
同	二十六日(日)	午前	同　日下部教會	說教
同	同日(日)	午後	同　同教會祝賀會	演說
同	同日(日)	午後	同　同教會	說教
同	二十八日(火)	午後	同　市川教會	說教
同	三十日(木)	午後	同　勝沼教會	說教
十二月	一日(金)	午後	同　猿橋講義所	說教

明治四十五年

一月	十三日(土)	午後七時	大阪市谷町美教會	說教
同	十四日(日)	午後七時	同　福島教會	說教
同	廿一日(日)	午前九時	青山長者丸教會	現時社會の狀態
同	廿七日(土)	午前七時	宇都宮圖書館	大小經重を誤る勿れ（生命は身體よりも大さる）
同	廿八日(日)	午前十時	同　旭町美教會	說教
同	同日(日)	午後七時	同　圖書館	演說
同	三十日(火)	午後二時	橫濱蓬萊町日美教會	葬儀說教（故二宮氏の爲め）
二月	四日(日)	午前十時	神奈川教會	信仰と時勢
同	十一日(日)	午前十時	青山學院	說教
同	十八日(日)		生澤二宮氏宅	說教
同	同日(日)	午後二時	生澤村小學校	演說
同	廿三日(金)	午後七時	西那須野會堂	勵みて天國を取れ
三月	九日(土)	午後七時	京都青年會	演說

同 十日（日）	午前十時	同 組合教會	國是と宗教
同 同日（同）	午後七時	同 中央メソヂスト教會	道德と信仰の調和力
同 十一日（月）	午後七時	岡山市メソヂスト講義所	說教

三月十三日より發熱、十四日より年會組織にも欠席、遂に二十六日に至り永別の悲痛に遭遇せり、嗟矣。

MY OWN CONVERSION.

The reason why I speak of my own conversion, is not that I have had any remarkable experiences. It is simply because I was one of the first converts in Japan when Christianity was not diffused in Japanese society at all. And therefore my case may represent some others at the time in many respects, and you may know in what condition the minds of Japanese young men of the time were, and at the same time you may find peculiarities of some Japanese Christians even now.

In 1859 the four first Protestant missionaries (Dr. Brown, Dr. Verbeck, Bishop Williams and Dr. Hepburn.) arrived in Japan from America. They were the pioneers in this virgin soil, because Japan was secluded from other parts of the world for about three centuries, and the Christianity once propagated by Jesuit Missionaries was entirely annihilated by bloody persecutions. And ever since it was prohibited by the law. They arrived in Japan safely, but they could not approach the people to accomplish their mission, for the prohibition was still in force. By the grace of God they waited for thirteen years with unconquerable perseverance. At last the time came to carry out their mission.

In 1868, the great restoration of Imperial power took place, and the open door became the national policy, and the whole nation saw the necessity of adopting western civilization in order to make the nation strong enough to keep up with other nations of the world. This caused hundreds of young men from different parts of the country to come to the missionaries, to get a knowledge of the western languages and sciences. This was a providential opening for missionaries to give them something better than mere knowledge of the languages and sciences. Yes, they tried to give them the Bible before they gave some other things. The time was ripe. Many young men accepted this new doctrine, facing the persecutions. They were ready to endure any hardness for the cause.

In 1872, on the 10th of March the first Protestant church was organized by eleven young men under the guidance of American Missionaries. And on the first Sunday of May the speaker was also baptized,—(with one young man and 3 young women)—, and enjoyed the privilege of joining the infant church. And ever since I have been thankful for the privilege of being a son of God.

Now before proceeding in detail, it seems to be convenient to state a little the general condition of religions in Japan at that time. Shintoism—native religion so called—was nothing but homage to and worship of the spirits of ancestors and departed heroes. They have no systematic doctrines. Its temples are clean and simple, no images, no idols except tablets with a name or relics, with a round mirror, signifying brightness and perfection of virtue. Its forms are very serious. They were supported by the public funds. They never preached to the people, as now they do.

Buddhism, the religion most prevailing among the people, was mostly supported by the public funds, central and local. They did not endeavor to teach the people of their truth. The secrets of their hold on the people were their prayers for their departed souls, and also their testimony that they were members of the Buddhist Churches. Confucianism, the most influential among the Military class, was a politico-ethical system. It does not teach a spiritual world, either divine nor human.

When I was young, the religions of Japan were in a sleeping condition. Under such a condition of religions, being a son of a military family, I never recieved any religious training, except Confucianism, which is not properly to be called a religion. My moral instruction was simple. It was, in short, to be faithful to my feudal lord, to obey my parents, teachers, and elders and to do my best for the state, without regard of self-interest, whether in the present or future. This was the common ethics among the military class which also influenced all common people.

It was my constant aim not to disgrace my clan and family by my misconduct. I had an implicit belief in heaven, though very

vague and indefinite, and was never skeptical of the existence of the spirits of ancestors and heroes. I used to visit the tombs of our feudal lords and my ancestors at least once a month. It was simply to pay respect but not to expect any blessing. Confucius, as a moral teacher and statesman, was my highest ideal. But after all, I had no spiritual and heart searching overseer above or within me, but I was my own master. Once I made special effort myself to be true, pure, and just by the light of my conscience, according to the doctrine of Confucianism. Oh how hard it was; I had furious fightings with temptations day and night. One day I succeeded a little, another day I was utterly defeated. Always surrounded by fears, finally I was sick in my soul and body. Thus, while I was staggering about, knowing not what to do, the time draws near for the restoration of Imperial power, and there was great confusion throughout the country. I was unconsciously influenced by this political change and became ambitious and adventurous like other young men of the time. Then the civil war occurred. The young men who took part in the political agitation, being away from home, became very loose in their conduct. Looking back to the time I can not help feeling humiliated. It is horrible to think of the bad habits imprinted on my mind and heart. Fortunately, the war did not last very long. Taking the defeated side, I was disappointed and disgraced.

In 1870, I could resume my study as before in my native city in the north of Nippon. At that time I saw a Chinese Bible which a friend of mine brought out of curiosity from Yokohama, an open port. I borrowed it from him out of curiosity also, and read the first part of Genesis with my other friends very secretly. This was the only copy ever introduced to north Japan, and I was 21 years old. In the first line I found, "In the beginning God created the heaven and the earth." That struck me, and it was so sublime and majestic. But having no help for studying the Bible I could not go on any further.

In 1871, I went to Yokohama for study. Here I had a chance

struggle in my soul began to take place. Having no Christian friends around me within 500 miles I could not consult with any body. I hastened to Yokohama. It was still cold winter. I spent 24 days on the way to Tokyo. I came to Yokohama at the end of Feb. 1872. I found there my fellow students, who had been very indifferent or rather opposed to Christianity, were ready to be baptized. This surprised me and also encouraged me to seek the truth more earnestly for my own salvation. Here again the scriptural light came to me directly, recommending Jesus Christ as my only Savior, and also demanding my sincere repentance and reliance upon him who died for me. I was on my knees unconsciously. I confessed my sins and made unconditional surrender to Christ. But I did not think of future rewards, or, I should say, I did not know to think of futurity, because my religious sentiment was not yet well cultivated. I simply fled to Christ from the accusation of my conscience, and then from my faith in Christ. I was led to believe in the Fatherhood of God. In addition to this simple faith in Christ, my strong motive in embracing Christianity was for the sake of my own country. Finding our country was so behind, compared with the western nations in many respects, we were very anxious in bringing our country to the same level with the advanced nations.

In closing I testify honestly that the most essential secret of the spiritual life is the personal communion with Christ in simple faith. Since my conversion I have passed through different stages of life, although my principal work has been in school and church. For a time I was a member of a provincial congress in my native prefecture, before our National Parliament was organized. I had the chair in the congress for two years. Thus having connection with political society, I had hard experiences in order to keep my Christian character without blame, among so called politicians, whose morals were so loose and low. Jesus Christ was my only refuge. A prayerful heart was my only shield against the fiery darts. In such a time, thank God, I had got a new spiritual ex-

to come in contact with American Missionaries, and I had to study the Bible before I took other studies every day. From the first I could accept the belief in the existence of God, but in many things I could not agree with them, and was offended against Christianity. For instance, "Therefore shall a man leave his father and his mother, and cleave unto his wife: and they shall be one flesh." Gen. 2; 24. That offended me very much, and I thought that is a strong evidence that Christianity is an evil sect which will destroy the order and peace of society, and deserves to be prohibited. But there was one thing which could soften my offended mind so as to make me to be patient and thoughtful. That was the kindness of the Missionaries to me, and their prayers, so earnest and sincere for their pupils and the nation, while the people were watching for a chance to drive them out of the country.

This was a great question to me, as well as to my fellow students.

In 1871, another great change occured in the country. The feudal system was abolished entirely. Consequently the military class families lost all the privileges from the clans to which they had belonged for centuries. Those young students with big hopes and ambitions suddenly became helpless. A thick cloud was hanging over the way of my life. I was obliged to go back to my home utterly discouraged. It was cold winter, I travelled (in a chair, being sick,) over five hundred miles, spending 3 weeks on the way, and I found my family very unsettled in a poor village. There was no steamer, no rail, no jinriksha. The disappointed young man felt that every thing in the world is uncertain, and he himself so weak and insignificant. The circumstance made me very humble, and led me to see the real situation of a sinful man. Then strangely, many good lessons and doctrines in the Bible, which I studied very indifferently, became fresh to my mind, and my moral sense became sharp and vigorous, and my ideals higher. I felt deeply that I was a sinner and my moral responsibility so great toward God and men, and I could not save myself. A severe

perience by close communion with Christ out Lord. It was a sweet hour when I was conscious I was with my Lord, with all of my heart and will wholly surrendered to his own. There is power. There is courage and peace. All fears and anxieties disappeared.

Christian friends, you have much advantage in learning of spiritual experience. You have fathers and mothers with spiritual experience. To us Christianity is new in Japan, so we have not many experienced men to lead us. We can learn advanced theories through books and addresses by scholars. But books are books, theories are theories. We need something more. We need the influence of living agents. And you have these advantages in spiritual affairs. You have your experienced fathers and mothers, if only you listen to them with humble spirits.

Friends, come to Jesus closer and closer. Let your light shine to glorify the Father and the Son the Savior, and I wish you to arouse a missionary spirit among you. Now all the world begins to awake in searching for the truth. The better time has come for Missionary work. Missionary work is more than philanthropic. It is the Lord's work. The Lord wants his people to go to all nations to teach them and to save them. Missionary work is for all men. All men need salvation by nature. They need the true knowledge of god. They want eternal life. They need well prepared warm-hearted, broad-minded men. Salvation can not be done by machines, but by personal agents who know the will of the Savior. Friends, think over this matter. May God. the Father lead you, guide you in your thinking, and give you the right decision.

We hear that many in Europe and America are thinking in reference to missionary work in the Far East, that it would be better to evangelize China and Korea first, then come back to Japan, when the work would be easier. Or they think it would be sufficient, at the present, to leave Japan in the hands of Japanese Christians. This would be a great mistake. Our Christians, however, ambitious they may be, are too weak to be responsible for the whole work, and it will be at least several generations before

Christianity in China and Korea will become strong enough to influence Japan. The last war in Manchuria well illustrates this case. Before Port Arther was taken, the Japanese Army could not take Mukden. Japan is the Port Arther, though smaller than Mukden,—China. Or Japan is 203 metre hill. Until Gen. Nogi sacrificed his two sons with several thousand brave men for this one hill, Gen. Stoessel did not lift up a white flag. Japan can not sleep till all China is converted. She will influence for good or evil all her neighbours. To be frank, I am sorry to say so but this is a fact, even now, through several agencies in Japan all sorts of bad isms and evil influences, new and old, are being introduced into China and Korea. Such things are very injurious to Japan, but much more so to China and Korea.

Dear friends in Christ pray for us and help us as much as possible.

大正七年十一月十日
大正七年十一月十三日

（定價金參圓）

東京市青山南町七丁目一番地
編纂者　高木壬太郎
東京市京橋區明石町八番地
基督教興文協會代表者
エス・エチ・ウエンライト
發行者
東京市京橋區日吉町十番地
印刷者　渡邊爲藏
東京市京橋區日吉町十番地
印刷所　民友社
東京市京橋區明石町八番地
發行所　日本基督教興文協會

不許複製

324
582

終